

AMDAダイジェスト

発行：1997年12月

発行元：〒700岡山市楠津310-1

AMDA (アジア医師連絡協議会)

TEL086-284-7730 FAX086-284-8959

InterNet : <http://www.amda.or.jp>

編集者：田代邦子, 大谷直美, 飯島恵美

これからのAMDAで働く人たちに



医師 吉岡 秀人

プロジェクトをするに当たってその大きさや方法論のみに価値を見いだすやり方にはあまり私自身は賛成しかねることが多い。どのような大きさのプロジェクトであれ人間関係にその基盤を置くのであるから、むしろそのプロジェクトをする人間の考えや想いこそ最も大切な要素だと思う。その大きさやそれにかかる金額などは結果の部分でありそれに振り回されないことが大切ではないだろうか。いわゆる国連=西洋流のやり方のみが正しいと思っているのは大きな視野を失っていると思う。このような方法論はこれからも大きく変わるでしょうさらに発展していく途上のものであるのだからそのみに価値をおいてプロジェクトを決める必要はないと思う。どのようなプロジェクトを打ち出すか、それはもうその人自身の個性が問われているわけで無理に他人に併せてそのオリジナリティを失う必要はないと思う。要はそれが本当に対象となる人たちのことを考えてなされたかどうかと言うことと、自分のすべての能力(年齢、お金、経験、スタッフの質、任期、援助体制など)を冷静に評価して計画されたかどうかだと思う。ただし個性を発揮させることと、独断に陥ることをしっかり区別できることが大切だと思う。

国外にでて働くとき私達はやはり日本や日本人という立場を背負うわけで、いい意味で自分たちを誇れる生き方をしようとは心がけていた。これは何人と比べてどうかという様な安っぽい優越意識ではない。真に日本人という意味での個性を他の国民と比べていい悪いと評価するのではなく正に人としての道に照らして正しく発揮されているかどうかを常に自問してこそ真に国際的といえることができるのだと思う。

私を中心として活動がある場合は、もし私が間違っただけでなければ、日に日に人々の信頼は増えて行くだろうし、周りのスタッフたちもその活動の中でうまく人間関係を形成していくのだと思います。その組織の中でお互いが亀裂を生じた信頼関係を喪失しているような場合、やはりその中心となる人物やそのプロジェクト自体に何か無理や問題を含んでいると考えた方がいいと思うのです。そのプロジェクトはまたそれに関わる人たちの作用・反作用の如く人間的に高めてくれるべきものと言えると思うのです。

自分自身が幸せでなければ他人を幸せにできないという発想とは逆転しますが、どんなに貧乏でも親が子供になけなしの食べ物を与えたときにも幸せを感じるように、他人を幸せにしようとする事で自分に幸せを感じる様になれることができれば必ず人種や国境を越えていけるのだと思います。これは真理だと思っています。そのためには私は、「いかなる状況に於いても、ただひたすら自らの使命のみを遂行することに心を尽くし、他人には信頼をかけ、独断的な期待はせず、威張らず、媚びず、そして、いつも周りに心を配り続けること」が、大切だと思っています。

AMDA ラテンアメリカ合同会議報告

(国際医療協力 vol.20 No.8 より抜粋)

菅波 茂

1997年7月26-27日の2日間にわたってブラジルのサンパウロにてブラジル、ペルーそしてボリビアの3支部による第1回ラテンアメリカ実務会議が開催された。そして災害等に関する相互救援活動支援が決定された。AMDAにとって記念すべき年になったと率直に喜びたい。ここに至るまでの経過説明として下記の3点を特徴として挙げたい。

- 1) 日本財団のメンバーによる疾病および災害等の緊急救援活動体制の整備
- 2) APRO (アジア太平洋緊急救援機構) の推進
- 3) 中南米広島県人会との連携

最初に日本財団のメンバーによる疾病および災害等の緊急救援活動体制の整備について。2年前からアジアおよび太平洋の疾病大流行や自然災害の緊急救援活動体制の整備に関する予算、更に緊急救援活動のための緊急予算を日本財団からいただいている。ラテンアメリカにおける体制整備はAMDAブラジルとボリビア支部が積極的に推進してきた。今後はこの3支部を中核としてメンバーを増やしてより迅速にして効果的な対応システムが構築されていく可能性が高い。

次にAPRO (アジア太平洋緊急救援機構) の推進について。第1回の国際会議は岡山で、第2回は沖縄で、そして第3回会議はこの10月4・5日に広島で開催予定である。過去2年間でAPROの自然災害救援活動はめざましいものがある。具体例でも下記の如くである。自然災害救援活動の時間との格闘には相手国にパートナーがいることがどれほど重要なことか認識できた。

- 1) インドネシア・スマタラ島地震緊急救援プロジェクト (1995年10月)
- 2) メキシコ大震災緊急救援プロジェクト (1995年10月)
- 3) フィリピン台風被害緊急救援プロジェクト (1995年11月)
- 4) バングラデシュ竜巻緊急救援プロジェクト (1996年5月)
- 5) モン川流域大洪水被災者緊急救援プロジェクト (1996年5月)
- 6) バングラデシュサイクロン緊急救援プロジェクト (1997年5月)

APROの自然災害救援活動の資金は常に日本財団からの支援によっていることを報告するとともにここに厚く感謝する。沖縄県および広島県との連携を中核にしてAPROの強化と拡充を今後も推進する予定である。

最後に中南米広島県人会との連携について。これはAMDAと広島県が共催したNGOカレッジがご縁で発足した構想である。移民の方々は異文化との共存共栄に卓越した見識と経験をもっている。日本の国際社会における今後の役割を考えるとき移民の方々の見識と経験は財産であり、AMDAとしては是非欲しい人的財産である。現在AMDAは中南米広島県人会と共同プロジェクトを実施するための準備および調査に入っている。

AMDAは現在アジアとアフリカで重点的にプロジェクトを実施しているが、ラテンアメリカ3支部の積極的なリーダーシップのもとにラテンアメリカのプロジェクトも展開していきたいと考えている。関係者各位の暖かいご理解とご支援をお願いしたい。

AMDA 国際ボランティア研修センターの開所式に参加して

(国際医療協力 vol.20 No.9・10 より抜粋)

アジアの教育支援の会 代表 森 暢子

1997年8月18日、フィリピン、マニラ市において「AMDA 国際ボランティア研修センター」の開所式が行われた。私たちアジアの教育支援の会 (AEA) を中心としたメンバー10名は期待と多くの目的を抱き、8月16日に日本を出発した。

このセンターの設立に際しては菅波代表を中心にいろいろな意見交換がなされ決定された。日本においてもボランティア精神が高まりつつあり、志す人々も多くなってきた。教育の場においてもこれからは「心の時代」と位置付けられ、「ボランティア」の文言がいろいろな場面に取り入れられようとしている。国際的にも「21世紀はボランティアの時代」と言われ、世界共通の価値判断である「平和」を求め、地球規模での人道主義、相互扶助の精神が高まりつつある。これら世界の人々との共存をめざして、これからの若い人たちや指導者、あらゆる場での社会人などにボランティアの体験と研修の場の必要性を感じたのである。

センターの目的としては下記の通りである。

- 1) ボランティアに関わる人材の育成をはかる
- 2) 教育関係者、公務員、学生、その他の人たちのボランティア研修を推進する
- 3) ボランティア・ネットワークを進め、コーディネーターおよび指導者の育成をめざす。

ボランティア研修センターの開所式は、マニラ市長を始めフィリピン側の人々と私たちのメンバーに加え、菅波代表、逢沢議員らでリボンカットをし、盛大に開所を祝った。このセンターには事務室、図書室、研修室、ストックルーム他、キッチン、トイレ等の設備が整えられている。

このセンターを拠点に、国内はもちろん国際的にも通用する人材育成の仕事が出来るよう努力しなければと心を新たに。最初の試みとして「ボランティア研修センター」がNGO活動の盛んなフィリピンで始まったことになる。今後は、スタディツアーの内容の充実、もっと専門的な学習をしたい人々のためのコース内容など、多くの課題を抱えていると思う。皆さんで力を合わせ一層の充実をはかっていきたいと思う。



開所式でのテープカット

* 研修センターに関するお問い合わせは AMDA スタディーツアーデスク (TEL082-227-0011) まで。

AMDA -カンボジアクリニック (ACC) 報告

(国際医療協力 vol.20 No.9・10 より)

AMDA - Cambodia Dr.Sieng Rithy (翻訳 荻野千明)

97年7月にACCを開院して以来、身体障害者や、プノンペ

ン近郊の村々の貧困者層への保健医療活動を充実させるため、多忙な活動を続けている。

このACCには3人の医師と、2人の看護婦がおり、月曜日から土曜日の午前まで、1日8時間半開院し、診察を行っている。当初、診察に訪れる患者は、1日平均9名程度であったが、日に日に患者数は増加し、現在では内科、外科診療等、1日15~30名の患者数を抱えている。ACCを訪れる大多数の患者は、身体障害者や貧しい人々であり、ACCの方針として無料診察をおこなっている。ただし、1部の人々に対しては低料金での診察をおこなっている。現在、ACC周辺の人々への保健衛生教育と栄養摂取のプログラムを計画中である。私たちはこれらの活動を通して、ナショナルプログラムであるエイズ、結核、保健衛生学を保健省と共同研究していくつもりである。これらの活動の他にも、ACCでは、貧困者層の環境から発生するいくつかの病気に対する研究、特に精神病治療法や生活衛生学の研究もプログラミングしている。

またACCでは、本来の使命であるカンボジアで起こる全ての緊急事態に対応する準備ができています。実際、カンボジアの地方を脅かしている災害、洪水を解決すべく方法も模索している。将来はAMDA -カンボジアのスタッフの質の向上のために、日本において保健医療の研修、人材育成に関する研修ができることを望んでいる。

最後にAMDA -カンボジアのスタッフ全員は、日本のみなさんからのカンボジアでのプロジェクトに対する暖かいご支援にとっても感謝しております。この誌面をお借りして御礼申し上げます。今後もAMDA -インターナショナルの方針である "Better Quality of Life for a Better Future" にのっとりベストを尽くすつもりです。

**ネパールに養護学校を / AMDA 高校生会からのお願い**

AMDA 高校生会代表 三原 洋一

AMDA 高校生会は、AMDA のネパール子ども病院 (11月6日に起工式が行われた) に併設する養護学校建設プロジェクトに参加することになりました。そのため今年8月ネパールへ視察に行き、そこで身体に障害を持つ子どもたちとふれあいました。ネパールには養護学校がほとんどなく、障害のある子どもたちが教育を受けられない状態にあり、できるだけ早い養護学校建設の必要性を実感しました。

現在、建設費用の一部 (100万円) を集めようと、高校生会では街頭募金や、使用済テレホンカード・書き損じ葉書・未使用切手収集を行っています。どうかご協力をお願いいたします。

AMDA 高校生会連絡先

701-12 岡山市楠津310-1 AMDA事務局内

TEL 086-284-7730

FAX 086-284-8959



JEN 18ユーゴスラビア報告/援助物資

(国際医療協力 vol.20 No.9・10より抜粋)

調整員 西野 裕子

1. 概略

昨年日本からの旧ユーゴスラビア向け援助物資は、9月下旬にイタリアのトリエステに到着し、日本通運によりザグレブのUNHCR倉庫に運ばれた。あらかじめ配布先が決定しているものもあったが、未決定の物資は各オフィスからの希望を出してもらった上で決定した。物資の配布、使用方法はプロジェクト内容や地域のニーズに合わせて各JENオフィスに考慮してもらったが、JENのプロジェクトでの使用、近辺の難民センター、他の援助団体や関連団体/施設への寄贈に大別できる。最終的には人々が援助物資に頼らず生活できる状況に向かうべくJENが活動しているのだが、難民、被災民の生活状況は一般的にまだまだ困難である。昨年届いた物資同様、今年日本からの援助品が送られれば配布先は多分にあり、JENと受益者にとり喜ばしいことである。

2. 配布先 (本誌参照)

3. 現地での保管、輸送

1) 保管: UNHCR Zagrebの倉庫にポシェットとともに保管を依頼し許可を得た。イタリア、クロアチア間の国境でトラック輸送が円滑にいくよう、UNHCRより積み荷が援助物資である証明書を作成してもらい、イタリアの日本通運支店に送った。UNHCRの倉庫から物資を受け取るにあたっては、毎回、1日前までにLoading Instructionを作成してもらうよう、受け取る物品名、数量、配布先、受け取り日時、輸送手段を明記したファックスをUNHCR Logisticsに送った。

2) 輸送: 下記以外はJENの車で輸送した。車の燃料代を節約するため、物資輸送のみのために配布先のオフィスに向かう、あるいはザグレブまで出向いてもらうことを極力避けた。下記の物資は大きさ、量の面から他団体に一括輸送してもらう方が良いと判断したものである。

①シポボオフィス向け/セーター17箱、ミシン1パレット、おむつ13箱: SFORにより陸路で輸送した。

②ゴラジュデオフィス向け/タオル6箱: SFORによりザグレブからサラエボまで空輸をしてもらい、サラエボでゴラジュデスタッフが受け取った。

4. UNHCRについて

UNHCR Zagrebではロジスティックスは大幅に縮小されたようで、以前には少なくとも3人はいた担当者が現在では1人のみである。この1名もロジスティックスの業務を引き継いでいるものの、プログラムで働いている。現在UNHCR Zagrebで所有されているトラックは東スラボニアへの物資運搬にのみ使用されている。UNHCRにボスニアへの輸送を依頼するのはほぼ不可能であり、たとえ東スラボニアへ運搬を依頼するにしても1トラック350ドイツマルク請求される。またUNHCRは今年1月より赤十字の倉庫を借りており、倉庫での様々な業務は赤十字のスタッフが行っている。倉庫は今年も使用できると思うが、赤十字、UNHCRの物資の都合によっては断られる可能性もありうるので、早めに使用願いを出しておいたほうが無難である。

5. 今後の援助物資輸送を計画する上での改善点、注意点

1) 箱、あるいはパレットの外側に物品名、数量、重さを日本語のみでなく英語でも明記する。→UNHCRや他団体の倉庫等での保管やこのような場所からの輸送を行う時、相手側による書類作成もろもろの手続きがより楽である。これはUNHCR Logistic

Officerより指摘を受けた。またローカルスタッフのみによる輸送や在庫確認の際、英語表示が必要である。

2) 日本発送時に配布先が決定している物品、特に重量の大きいものは可能であれば配布先オフィス近くにあるUNHCR倉庫に直接輸送できればありがたい。特に援助物資がポシェットとともに届くのであれば、各地に直接輸送する手続きをポシェット、援助物資一括して行えるはずである。→ザグレブから各オフィスにJENの車で輸送する時間、コストが削減できる。重量の大きい物、個別では少量でも配布数が多い物品の箱はJENの車では輸送困難な場合がある。

3) 日本側、ザグレブオフィス側に共通の物資リストを作成し、双方で持つ。リストには、物資発送前に可能な限り物品名、箱番号、梱包状況、箱数、箱の個別サイズ、個別重量の事項を記入する。なお、案として理想的なリストを別表3に記入例とともに添付した。→お互いが受け取った物資品目、数量などの確認が容易である。また現地で他団体に輸送を依頼する際、梱包状況、箱の個別の大きさと重量が必要である。

4) 物資の対象年齢や使用方法などを明確にする→去年届いたおむつが大人用との連絡を受けたが実際には乳幼児用で、スラボンスキプロッドからザグレブへ送り返さなくてはならなかった。

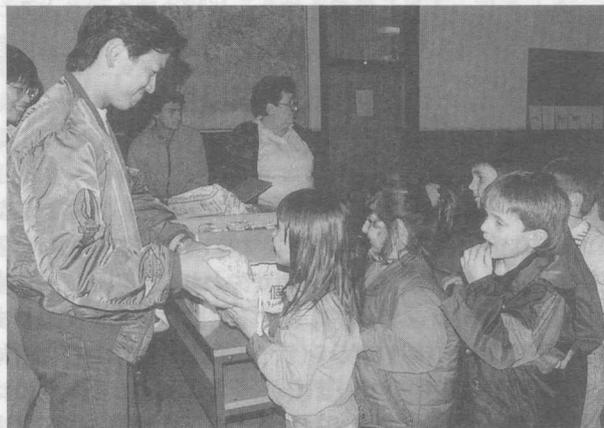
5) 物資は使用方法が比較的簡単、単純なものがよい。→日本語での説明書があっても受益者は読めない。また場合によってはJENスタッフがすべての人にいちいち使用方法を説明する余裕がない。

6) 非消耗品については新品でなくとも、まだ使用できる中古品でも差し支えないが、消耗品については新品、それに近いものが望ましい。→昨年送られた学用品の中には使用に値しないクレパス、絵の具が混じっており、受け取る側の気持ちを憂慮する報告がシポボオフィスより寄せられている。

7) 衣服類はなるべく大きいサイズが良い。→子供、大人共こちらの人は体格が大きい。

8) 日本発送から旧ユーゴ到着までの輸送中、物資の破損がないよう梱包する。昨年届いた物資に問題は全くなかったが、例えば昨年RKKから送られたセーターの箱には防虫剤が入っており、このような細かな気づかいはJEN、受益者にとって大変有難いものである。

9) 物資がどのようにプロジェクトなどに使用されているかを写真撮影して、可能なかぎり早く物資寄贈者、あるいはAMDA、RKKにお礼状とともに送る。→送った物資が現地でのどのように使われているかをこちらが報告するべきである。寄贈者にとり、寄付した物の使用状況が具体的にわかるのは喜ばしいことである。



スタッフによる物資の配布

魂を揺さぶるコンサートをめざして

(国際医療協力 vol.20 No.8 より抜粋)

岡山北方郵便局長 瀬政 光彦

第二回 AMDA 活動支援コンサート” アフリカンマエストロ” が7月20日、岡山県美星町の中世夢が原で開催されました。今回の実行委員は、名目上は夢が原の日高氏と私の二名でしたが、AMDAのスタッフを始め美星町内外のボランティアの方々多数



の参加で、すばらしいコンサートを作り上げることができました。この誌上をおかりして、心より感謝し、お礼申し上げます。

我々二名の実行委員は、今年の年明け頃から活動を開始し、どのミュージシャンを呼ぶかということから取りかかりました。このコンサートはまったくの個人レベル

のもので、特に公の機関から補助がある訳ではなく、この企画そのものを黒字にして行くことは、容易なことではありません。しかし個人個人の手作りのコンサートと考えれば、活動そのものは結構楽しいものです。“AMDA 活動支援”と銘打ちながら、経済的にはあまり支援することは出来ていませんが、菅波代表の言われる「お布施＝お金ではありません。AMDAと関われば楽しくなる。心地よい。何となくエネルギーがわいてくる。」という言葉に我々のしていることも無駄ではないと勇気を出して活動しています。また、菅波代表の言われる「違いは財産である」に共感します。自然が豊かであれば、植物も多種多様なものが共存できます。私はよく県北の蒜山に行きますが、そこには2000種類もの植物が共存できる豊かな自然がまだ残っています。こうした自然が急速に地球上から姿を消している事は、残念でなりません。人類が21世紀に生き抜くためには、まさにこの「違い」を理解し認め合うことが第一でしょう。「違い」を排除して来たため、多くの戦争や不幸が起きました。国や民族を越えて理解し合う努力を我々はして行かなければと思います。

日高氏と私の二人だけの実行委員会は、このコンサートを中世夢が原で開催することに少しばかりこだわっています。コンサートに参加していただいた方は、おわかりでしょうが、野外のあの雰囲気は、いくら立派なコンサートホールでも味わうことは出来ないでしょう。中世夢が原の囲炉裏の火をご覧になったことがありますか。夏の一時期を除いてほとんど一年中囲炉裏には火が入っています。薪の炎を見る事は、人が人であることの根源的な部分を揺さぶるように思います。少しばかり時間を作って、囲炉裏の火を見においで下さい。来年このコンサートも三周年を迎えます。今からじっくりと構想を練り、皆様の魂を揺さぶるコンサートにして行きたいと考えています。今後とも、御支援の程よろしくお願いいたします。

ボランティアリレー

中国銀行 妹尾 卓哉

私が AMDA の存在を知ったのは、1995年1月に発生した阪神大震災の時でした。数多くの尊い命が失われたあの歴史的惨事により、日本人のボランティアに対する意識は大きく変わりました。特に岡山では、当時のボランティア救援活動が他の自治体と比べ突出していたと聞いていますが、その原動力となったのは紛れもなく AMDA でした。その後もサハリン大地震、中国雲南省大地震をはじめ世界各地での AMDA の活動は、岡山県民の心に

訴え続け、そのボランティア精神は子ども達にまで波及していきました。AMDAでは「西のジュネーブ、東の岡山」をスローガンとして岡山県の国際貢献と地域の活性化を目指し医療救援活動を行っております。当行では従来より同じ岡山に本店を置く企業として、何か協力が出来ないものかと考えていました。そうしたなかで昨年8月に「AMDA ボランティア定期預金」を発売させていただくこととなりました。この商品は、お客様にお預け入れいただいた定期預金(スーパー定期1年もの)の税引後利息の20%を毎年AMDAにご寄付いただくものです。また、それに加えて当行からも1口お預入れいただくごとに100円の寄付を行います。お客様は定期預金をお預けいただくだけでボランティアに参加することができます。当行としては預けて下さるお客様の「善意」を国際貢献に役立てていただく橋渡し役として商品を提供するとともに、AMDAの活動をできるだけ多くの方へ伝え、ボランティアの輪を少しでも広げるお手伝いができればと思っています。

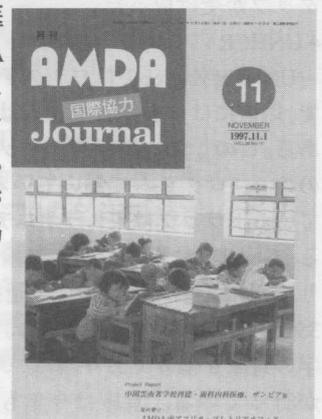
地方の時代が叫ばれている今日、AMDAがここ岡山で地球規模のボランティア活動を展開していることは非常に大きな意義があることであり、私たち岡山県民にとって誇りであります。これからも人道援助の国際拠点としての「世界都市岡山構想」の実現に向け、益々のご活躍を期待しています。

AMDA 活動状況

- '97.7: AMDA カンボジアクリニックプロジェクト開始
- '97.8: AMDA ベルー支部設立
- '97.8: AMDA 国際ボランティア研修センター開所/フィリピン(マニラ)
- '97.9: 南アフリカ女性自立支援プロジェクト開始
- '97.9: ウガンダ ABC プロジェクト開始
- '97.9: ケニア ABC プロジェクト開始
- '97.9: ルワンダ ABC プロジェクト開始
- '97.10: APRO 「'96アジア太平洋緊急救援フォーラム」開催/広島
- '97.10: 「'97おかやま国際貢献NGOサミット」開催(トピアの会)
- '97.10: インドネシア地震緊急救援プロジェクト開始
- '97.11: ベトナム台風緊急救援プロジェクト開始

編集後記

・11月よりAMDA月刊誌「国際医療協力」を大幅に変え「AMDA ジャーナル」として創刊しました。活動報告に加え様々なボランティア活動も紹介していきます。「AMDA ジャーナル」に関するお問い合わせはAMDA事務局(TEL086-284-7730) 田代まで。



- ・AMDAでは使用済テレフォンカード収集キャンペーンを'98年2月10日(必着)まで行なっています。ご協力をお願いします。
- ・この頃我が家のパソコン関係の出費がかさみます。といっても中古品ばかりなのですが。(飯島)